福富正実・一柳俊夫＝編訳

前資本主義的構成体の諸問題 I

――世界史の基本法則の再検討――

未来社

前資本主義的構成体の諸問題　I
（全2冊）
一九八二年九月二〇日　第一版第一刷発行

定価　七五〇〇円
編訳者　福冨正実
　　一柳俊夫
発行者　西谷能雄

発行所　株式会社　未来社
東京都文京区小石川三―七―二
電話〇三(八一四)五五二一＝代表
振替（東京）七―八七三八五番

本文印刷＝ひろせ印刷
製　本＝今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえします。

まえがき

周知のように、マルクス・エンゲルスによって基礎づけられたマルクス主義的歴史科学がブルジョア科学に取って代わって出現した《新興科学》の重要な一分野として全面的に体系化されはじめたのは、一般に一九二〇年代末―一九三〇年代のことである。だが、マルクス主義的歴史科学は、人間社会の進化の歴史的過程を種々様々な社会的諸構成体の前進的交代として理解するような基本的見地に立脚している。したがって、全面的な体系化のすでにこの初期的段階においても、マルクス主義的歴史科学は、前資本主義的構成体の基本的な理論的諸問題の解決をもっとも緊急な課題として提起しなければならなかった。このようにして、たとえば、一九二〇年代末―一九三〇年代のわが国のマルクス主義的歴史科学においては封建論争が展開され、あるいは、アジア的生産様式論争→日本古代社会論争が展開された。もちろん、これらの諸論争の展開は、それ自体としてはあきらかに日本資本主義の現状分析（＝戦略論争）と直接的に関連しておこなわれた。しかし、まさに歴史理論の形成という観点からみるならば、わが国の歴史科学におけるこのような特殊的諸論争の展開もまた、前資本主義的構成体論の領域における国際的な規模での一般的な問題提起の重要な一環であったとみなされなければならないであろう。

ところで、一九四〇年代末―一九五〇年代におけるわが国の戦後の歴史学界においては、《世界史の基本法則》の究明あるいは《社会構成史体系》の構築というかたちで、前資本主義的構成体の新しい理論的諸問題の解決が提起された。このばあいに、わが国における戦後改革（＝民主主義革命）の遂行との関連においてもっとも重要視されたのは、封建的構成体から資本主義的構成体への移行の問題である。ところが、わが国のマルクス主義的歴史科学におけるこの重要な問題の提起もまた、資本主義体制から社会主義体制への全面的な移行に直面して国際的に展開された封建制度から資本主義への移行論争、すなわち、ドッブ＝スウィージー論争に端を発して展開された国際的論争のひじょうに強い影響を受けていたと指摘されなければならない。まさにこの資本主義への移行論争との関連において、《封建社会の基本法則》をめぐる論争もまた注目された。

しかし、一九三〇年代中期から一九五〇年代中期までのマルクス主義的歴史科学は、一般にスターリン主義的理論構成の硬直化した枠組のなかにはめ込まれていた。だが、一九五六年の《スターリン批判》が重要な契機となって、一九五〇年代の後半から世界史の時代区分やその他の重要な理論的諸問題にかんするスターリン主義的通説が根本的に再検討されはじめる。まさにこのような状況のなかで、あたかもベトナム戦争における最大の危機の年であった一九六四年を画期として、アジア的生産様式論争が国際的に再開された。そして、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの諸民族の世界史の舞台への本格的な登場を背景にした一九六〇年代―一九七〇年代における人類学・民族学の領域における一連の新しい問題提起は、社

会史あるいは経済史の領域においてだけでなく、とくに文化史の領域においてもマルクス主義的原始＝古代史学および初期中世史学にたいして新しい理論的再装備を強く要求している。ひじょうに重要なことには、再開されたアジア的生産様式論争や新しいマルクス主義的原始＝古代史研究および初期中世史研究は、一八七〇年代末―一八八〇年代以降の研究段階における後期マルクス・エンゲルスの《まったく新しい観点》にかんする研究の新しい進展にたいして完全に対応するような前資本主義的構成体論の全面的な再構築をうながした。他方では、アジア的生産様式論争を再開させるに至った重要な諸契機の一つとして西ヨーロッパ中心の歴史観が大きく反省されつつあるなかで、一九七〇年代においては、いわゆる《周辺部》を舞台にして《新しい移行論争》もまた鋭く提起された。あきらかに、この《新しい移行論争》の展開は、《階級社会への移行》過程の理論的諸問題の全面的な再検討の進展とあいまって、現存する社会主義の位置づけやマルクス・エンゲルスがめざした社会主義の内容の明確化をもふくむ今日における《資本主義体制から社会主義体制への移行》過程の根本的な理論的再検討にたいしても重要な関連をもっている。もちろん、現実によって要請されたこれらの新しい問題提起にたいして対応しつつあるマルクス主義的歴史科学の新しい国際的動向もまた、未来の社会への移行の展望のもとに今日におけるわが国の歴史学界にたいして大きな影響をおよぼしつつある。

さて、わが国のマルクス主義的歴史学界のこのような問題状況のなかで、本書（第一分冊および第二分冊）は、一九五〇年代後半から一九七〇年代初頭までのソ連邦の学界において発表された前資本主義的構成体論の基本的諸問題に関連する代表的な諸文献を系統的に紹介しようとするものである。この第一分冊に訳載された諸文献の原題をしめすならば、つぎのとおりである。

① Обсуждение вопроса о генезисе феодализма в России и о возникновении древнерусского государства.

② И. В. Созин, К вопросу о причинах перехода восточных славян от первобытно-общинного строя к феодализму.

③ М. Н. Мейман, академик С. Д. Сказкин, К вопросу о непосредственном переходе к феодализму на основе разложения первобытнообщинного способа производства.

④ М. А. Барг, К вопросу о начале разложения феодализма в Западной Европе (о некоторых закономерностях феодальной денежной ренты).

⑤ А. И. Неусыхин, Дофеодальный период как переходная стадия развития от родоплеменного строя к раннефеодальному (на материале истории Западной Европы раннего средневековья).

⑥ А. И. Неусыхин, К вопросу о первом этапе процесса возникновения феодально-зависимого крестьянства как класса (теоретическая постановка вопроса).――《Возникновение зависимого крестьянства как класса раннефеодального общества в Западной Европе VI-VIII вв》, глава I.

⑦ А. И. Неусыхин, К вопросу об эволюции форм семьи

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

и земельного аллода у аллеманнов в VI-IX вв (в связи с толкованием термина «генеалогия»).

⑧ А. И. Данилов, Марксизм и марковая теория Маурера.——«Проблемы аграрной истории раннего средневековья в немецкой историографии конца XIX-начала XX в», часть вторая, 1.

⑨ А. И. Данилов, Марксистско-ленинская теория отражения и историческая наука.

⑩ И. М. Дьяконов, Община на древнем Востоке в работах советских исследователей.

⑪ М. О. Косвен, К вопросу о древневосточной общине.

⑫ И. М. Дьяконов, К проблеме общины на древнем Востоке (реплика М. О. Косвену).

⑬ А. И. Першиц, Ранние формы семьи и брака в освещении советской этнографической науки.

⑭ Л. С. Гамаюнов, О записях Карла Маркса, сделанных им при изучении книги Максима Ковалевского «Общинное землевладение, причины, ход и последствия его разложения».

⑮ И. М. Дьяконов, Проблемы собственности. О структуре общества Ближнего Востока до середины II тыс. до н. э.

⑯ Л. С. Гамаюнов, О марксовой концепции социально-экономического строя Индии (к постановке вопроса).

⑰ В. М. Массон, Становление раннеклассового общества на Древнем Востоке.

⑱ М. А. Виткин, Новая фаза дискуссии.

⑲ М. А. Виткин, Первичная общественная формация в трудах К. Маркса.

⑳ А. Я. Гуревич, К дискуссии о докапиталистических общественных формациях : формация и уклад.

もともと、本書の企画は、わが国の学界においても再開されたアジア的生産様式論争が急速に進展しはじめていた一九七三年頃におこなわれた。しかし、いろいろの事情があって、いまやっと、第一分冊が刊行されることになった。この間に、編訳者の両名を結びつける具体的な機縁をあたえて下さった古典古代史研究者の桑原洋氏は、不幸な死を遂げられた。本書の第一分冊が刊行されるにあたって、桑原氏の御冥福を改めて祈りたい。なお、当初の計画では、本書は、三つの分冊によって刊行する予定であった。しかし、第一分冊の刊行がひじょうにおくれたために、当初には第二分冊に予定していた部分の半分を別のかたち〔福富正実編訳『初期封建制度論争——中世社会史研究の諸課題——』（創樹社刊、近刊予定）〕によって刊行し、それの残余の部分を第三分冊に予定していたものとあわせて第二分冊として刊行したい。

一九六四年において再開されたソ連邦の学界におけるアジア的生産様式論争は、一九七〇年代の中期にはふたたび《未解決》のままで《終結》させられたようである。しかし、本書の編訳者たちはソ

ビエトの歴史科学のいわば《ルネッサンス》をあらわしていた一九五〇年代後半から一九七〇年代初頭までの諸文献を紹介することによって、今日におけるわが国のマルクス主義的歴史科学の前進のためになんらかの寄与をなしたいと考えている。最後に、困難な出版事情のもとにおいて本書の刊行を引き受けて下さった未来社社長、西谷能雄氏をはじめとする皆さんにたいして、心から感謝の意をあらわしたい。

一九八二年六月下旬

編訳者

前資本主義的構成体の諸問題 I

目次

第一部

ロシアにおける封建制度の起源の問題と古代ロシア国家の発生の問題の討議……一三
原始共同体的体制から封建制度への東スラヴ人たちの直接的移行の諸原因の問題によせて
（И・В・ソージン）……二〇
原始共同体的生産様式の解体を基礎にした封建制度への直接的移行の問題によせて
（М・Н・メイマン、С・Д・スカスキン）……三九
西ヨーロッパにおける封建制度の解体の開始の問題によせて（М・А・バルク）……七一
氏族種族制的体制から初期封建体制への過渡的発展段階としての前封建時代
（А・И・ネウスィヒン）……九三

第二部

部族法典におけるゲルマン共同体とロシア学派の共同体説（А・И・ネウスィヒン）……一一五
六―九世紀のアラマン人たちのもとにおける家族諸形態と土地アロッドの進化の問題
によせて（А・И・ネウスィヒン）……一三三
マルクス主義とマウラーのマルク論（А・И・ダニーロフ）……一四六
コヴァレフスキーの世帯共同体論とソビエト史学（А・И・ダニーロフ）……一五八

ソビエトの研究者たちの諸労作における古代東洋の共同体（И・М・ディヤコノフ）……一六三
古代東洋的共同体の問題によせて（М・О・コスヴェン）……一九〇
古代東洋における共同体の問題によせて（И・М・ディヤコノフ）……一九七
ソビエト民族学によって解明された家族と婚姻の初期的諸形態（А・И・ペルシッツ）……二〇八

第三部

K・マルクス『共同体的土地占有ノート』について（Л・С・ガマユノフ）……二三一
所有の諸問題。紀元前二千年紀の中期までにおける近東社会の構造について
（И・М・ディヤコノフ）……二三五
インドの社会経済体制にかんするマルクスの構想について（Л・С・ガマユノフ）……二六九
古代東洋における初期階級社会の成立（В・М・マッソン）……二八五
討論の新しい段階（М・А・ヴィトキン）……三〇三
K・マルクスの諸労作における第一次的社会構成体（М・А・ヴィトキン）……三一一
前資本主義的社会構成体論争によせて（А・Я・グレヴィチ）……三二五
解　説（福富正実）……三四一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

前資本主義的構成体の諸問題 I

——世界史の基本法則の再検討——

第一部

ロシアにおける封建制度の起源の問題と古代ロシア国家の発生の問題の討議

一九五五年一二月二六—二七日に、モスクワとレニングラードの歴史家会議が開催された。この歴史家会議における討議の対象は、『世界史』編集委員会によって準備された『世界史』第三巻第一五章であった。第一五章の表題は、《東スラヴ人たちのもとにおける原始共同体的体制の解体と封建的関係の発生（六—九世紀）。古代ロシア国家の形成と発展（九—一二世紀）》である。テキストの主要な部分は、B・T・パシュートによって執筆された。《九—一〇世紀における東スラヴ人たちの社会経済体制》と《古代ロシア国家の形成》という表題の二つの節は、A・H・ナソノフによって執筆された。《古代ルーシの文化》という表題の節は、H・H・ヴォロニンとB・T・パシュートによって執筆された。第一五章を編集した責任者は、Л・B・チェレープニンである。討論は、第一五章だけに限定された意見交換という枠を越えておこなわれた。討論においては、ロシア史の多数のひじょうに重要な諸問題が取りあげられた。

東スラヴ人たちのもとにおける原始共同体的体制の解体の問題は十分には研究されていないという立ちおくれが、討議において強調された。文書史料がほとんどまったく存在していないために、このテーマを研究するばあいの基礎資料は考古学の諸資料に限定されざるを得ない。西部チェコから中部ドニエプル左岸に至る中部ヨーロッパと東ヨーロッパの広大な地域においては、いわゆる「古墳」文化の考古学諸遺跡が保存されている。これらの考古学諸遺跡は、紀元前一千年紀の末期からはじまった時代の遺跡である。スラヴ諸国の学者たちの諸労作が証明しているところでは、「古墳」文化の諸遺跡の一部分は、スラヴ人たちの祖先が生活していた遺跡である。東ヨーロッパの区域、まず第一に中部ドニエプル流域における「古墳」文化の諸遺跡（墳墓と比較的最近に発掘された居住地）は、いわゆるザルビネツ型（紀元前二世紀—紀元二世紀）とチェルニゴフ型（紀元二—四世紀）の二つの年代グループに小区分される。ザルビネツ型の遺跡は、いくつかの隣接の考古学文化を通じてスラヴ・ロウジッツ文化と連絡しているといえる。ところが、チェルニゴフ型の遺跡は若干の類似した諸要素をもっているにもかかわらず、隣接の考古学文化からはっきりと区別される。

チェルニゴフ型の遺跡が普及している区域は、ザルビネツ型の遺跡が普及している区域よりもひじょうに広大である。この区域において発見される居住地はもはや都市廃墟ではなく、無防備の（防壁に取りかこまれていない）村落旧跡である。轆轤台で製作された土器が普及している。多数のローマ貨幣が発見されている。ガラス容器や装飾品などをふくむ多数の輸入品が発見されている。多数の諸遺跡（約三五〇箇所の諸遺跡）によって知られているチェルニゴフ文化は、若干の学者たちによってスラヴ文化として特徴づけられた。チェルニゴフ文化がウクライナの考古学者であるB・B・フヴォイコによって発見されたときから、五〇年以上が経過した。だが、われわれは、この命題がすでに論証されているとみなすわけにはいかない。いくらかときが経過してから、チェルニゴフ文化はアント文化と呼ばれるようになった。だが、ビザンツ関係の諸史料においてみいだされるアント人たちにかんする資料は、六世紀のものである。ところが、チェルニゴフ文化は、基本的には四世紀において消滅している。若干のウクライナの考古学者たちは、チェルニゴフ文化を研究してみるならば、つぎのように結論することができると主張した。すなわち、二―四世紀のスラヴ人たちのもとでは、手工業と商業と貨幣流通が発展しつつあった。それどころか、階級社会もまた発展しつつあった、と。しかし、このような結論は、考古学資料によっては確認されないではないか。まして、チェルニゴフ文化は、スラヴ文化に属していたという証拠をもっていないではないか（スラヴ人たちの遺跡やサルマト人たちの遺跡やゴート人たちの遺跡などのすべてが、チェルニゴフ文化に包摂されているようにみえる）。このような批判的見解は、П・Н・トレチャコフによって同意された。

討議の対象になった『世界史』第三巻第一五章においては、アント人たちの社会体制にかんする記述の一部分は、古墳文化の諸資料を典拠にしている。

この点についていえば、M・A・ティハノヴァやИ・И・リャプーシキンやM・И・アルタモノフなどの討論参加者たちは、われわれが東スラヴ人たちの社会体制と経済生活を再構成するばあいに、チェルニゴフ文化の諸資料を利用してはいけないと指摘した。討議参加者たちが強調したところでは、われわれは、まず第一にチェルニゴフ文化の諸資料を綿密に研究しなければならない。だが、われわれがチェルニゴフ文化の諸資料を綿密に研究するためには、チェルニゴフ文化の諸資料が公開されなければならない。

チェルニゴフ文化の諸遺跡を本格的に研究する作業が、ソ連邦科学アカデミー物質文化史研究所のスラヴ・ロシア考古学部門において開始されている。ごく近い将来には、東ヨーロッパ史の未解決の諸問題は、この研究作業によって解明されることができるようになるであろうと期待されなければならない。長い年月のあいだ、これらの諸問題は、然るべきかたちでは検討されなかった。チェルニゴフ文化はスラヴ的性格をおびているという命題が、科学においては定説になっていた。この問題にかんする別の諸見地は、出版物において討議されることがなかった。考古学においては、なんらかの考古学文化がどの人種に属するかは、文書史料によって知られている比較的に後期の諸資料から比較的に初期の諸資料にさかのぼることによって確定される。ところが、チェルニゴフ文化のばあいには、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com